

# ちよつとしい話

## ～ 遺言 ～

法然上人（幼名勢至丸）は、数え9歳の時に夜討ちにあい、父（時国）は殺されてしまいました。父の最後の言葉は、「汝さらに敵をうらむ事なかれ、これひとえに先世の宿業なり、もって遺恨を結べばその仇世々に尽きがたし、早く俗を逃れて家を出て、我が菩提を弔い、自らが解脱を求めよ」と法然上人に佛道に進むことを遺言として諭されました。第一号にて、お釈迦様は7日にして母親を亡くされておりますが、浄土教の祖、法然上人も幼少において親の死を体験してみました。法然上人は、父の言葉を胸に出家され、厳しい修行の末、私達のために浄土門（お念佛を称える事によって報われる）をお開きになられたのです。

中国の長安が破壊された状況を杜甫がその詩（春望）に

国に破れて山河在り 城春にして草木深し

時に感じては花にも涙を注ぎ 別れを恨みては鳥にも心を驚かす

烽火三月に連なり 家書万金にあたる

白頭搔けば更に短く すべて簪に勝ざらんと欲す

と詠っています。戦に敗れてびくびくしながら暮らし、花を見ては涙をこぼし、鳥の声さえも心をびくつかせ、頭髪も薄くなり、簪もさせなくなったとなげくばかりである。と、その意味からすると、宗教に救いを求めるでもなく、ただ生きがい無くしているに過ぎない。お釈迦様や法然上人の様に、佛道に精進し大衆と共にその真隨に道を求められた生き方とは大きく異なっています。

善入院油掛地藏尊